

## 「はだかの王様」から学ぶ

研修教育小委員会

吉川和暁

「はだかの王様」はアンデルセン童話の有名な物語である。

おしゃれな王さまがいた。ある日二人組の男(仕立て屋)がやってきて、馬鹿の目には見えない、不思議な衣装をつくることができるという。王さまは2人にその衣装を造らせた。

視察した大臣は、布地とやらがまったく見えないものの、困ったあげくに「仕事は順調に進んでおります」と報告する。

その後、視察にいった家来はみな「仕事は順調です」と報告する。最後に王さまがじきじき仕事場に行くが、「バカには見えない布地」は、王さまの目にもさっぱり見えない。王さまはうろたえるが、家来たちには見えた布が自分に見えないとは言えず、布地の出来栄えを大声で賞賛する。

王さまはお披露目のパレードを開催することにし、見えてもいない衣装を身にまとい、大通りを行進する。集まった国民も馬鹿と思われるのをはばかり、歓呼して衣装を誉めそやす。

その中で、沿道にいた一人の小さな子供が、「王さまは裸だ！ 王さまは裸だよ！」と叫び、群衆はざわめいた。「裸か？」「裸じゃないのか？」と、ざわめきは広がり、ついに皆が「裸だ！」「王さまは、裸だ」と叫びだすなか、王さまのパレードは続く。

我々医療関係者は、いずれの登場人物にもなることができる。

王様に一番近い身分の大臣になったとき、我々は第一発見者として果たして正しい進言（評価）ができるだろうか。最初の誤ちの罪は大きい。Yes man はフォローはできても正しい評価が望めない。Negative な評価を行うことは、時として勇気が必要だし自分の考えに正義を見出さなければならない。

家来ならばどう振る舞えるだろうか？身分（経験）の違いから物ごとはいややすいかも？大臣ほどの勇気・正義も必要ないか？しかし、上から押し付けられたストレスは大臣を超えるものかもしれない。王様（場合によっては大臣）からのパワハラの前に屈してしまうだろう。

国民もしかり。真実を目の当たりにしても、上の決めた事に従うという風潮に慣れてはいないだろうか？国民同士のひそひそ話は評価に値しないし、なんら解決にも至らないだろう。

我々は少年になる事が出来るだろうか？彼は本当に賢いのか？愚かなのか？他の大人たちと一緒に衣装を褒めていれば、きっとパレードは平和なうちに終了しただろうに。しかしみんなは知っている。王様が裸だという事を。そして正しい評価を受けないパレードもこれまた止まらない。

正しい評価は、早いうちに（城内で）、おおごとになる（パレードの）前に、受ける事が重要に思えてくるがどうだろう。その点からは大臣と家来の罪は大きい。

そして王様はどうして自らを正せなかったのだろうか？おしゃれな一面が目曇らせたのかもしれない。うろたえるほどの臆病者だから、周囲によく思われたかったのかもしれない。他者からの評価がなかったとしても、正しい自己評価があれば事態は收拾できた可能性もあっただろう。

当院では、今も裸の衣装が造られているだろうか？裸の行進は続いているだろうか？いつも正しく、勇気ある評価者でありたいものである。